

詩に浄化される身体

——余秀華という現象とその詩——

小笠原 淳

はじめに

二〇一五年の冬、中国に余秀華（一九七六—）という鋭の詩人が彗星のごとく現れた。二〇一五年一月に彼女の一篇の詩「穿過大半個中国去睡你」（中国のほとんどもを横切ってあなたと寝にゆく＝筆者訳、以下同）（二〇一四年）が「微信」（中国版ライン）で大量転送され、彼女はほとんど一夜にして現代中国で最も有名な詩人のひとりとなった。初の詩集『月光落在左手上——余秀華詩集』（月光は左手の上に落ちる——余秀華詩集）（広西師範大学出版社、二〇一五年）は四版を重ね一〇万部を売り上げて、この二〇年来の中国における詩集のベストセラーを記録している。



伝統的には文人による格式の高い文字芸術と見なされてきた中国の詩にあつて、農民女性が書いた詩がこれほどの勢いで知れ渡り、さらには文化的な事件にまで発展していったことは、ひとつの画期的な事象だったといえるだろう。余秀華を世に送り出した『詩刊』の編集者で詩人の劉年（一九七四—）は、彼女の詩を次のように評価した。

農作業をすることができない脳性麻痺患者でありながら、常人が及ばない言葉の天才である。顧みられない愛であれ、心深くに刻み込まれた痛みであれ、彼女の文字によってふっくらした朶のような重みと力が満たされるのだ。⁽¹⁾

この批評からも読み取られるように、余秀華は湖北の小さく貧しい農村の女性であり、身体には脳性麻痺の障害がある。「農民」「脳癱」（脳性麻痺）という社会的立場が「最底辺」にある境遇とその自由奔放な愛情の詩の強烈な対比によって、余秀華の名は一気に知れ渡り、一躍時の人となったのである。

著名な中国現代詩の批評家呉思敬は、余秀華が受容されていった最初の段階を次のように分析する。

底辺で生活をする詩人はどんな時代にも存在するが、底辺で生活し、さらに障害のある詩人はそうはいない。とくに「脳性麻痺」のレッテルが貼られた詩人はさらに稀である。詩の創作は高度に脳力を消耗する。「一つの詩を絞り出すたびに、数本の髭がなくなる」と言われてきたほどだ。「脳性麻痺」になっても詩を書くことができる、しかもよい詩を書くことができる。これ自体が話の種を作り出し、同時に読者の好奇心を掻き立てたのだ。

各メディアもまた、「脳性麻痺」「女」「農民」といったレッテルをこの詩人の前に冠し、詩とは文人の男性が書くものという固定概念とのギャップを強調して報道してきた。そのことがより多くの読者の興味を掻き立てた。しか

し、微信に余秀華の詩「中国のほとんどを横切ってあなたと寝にゆく」が大量転送されたとき、作者のこうした背景を知らず、ただ女性の立場から発せられた赤裸々な情欲表現に、彼女の詩がもつ生命力と直接的な訴求力に深く感銘した読者もきわめて多かった。このような場合、テキストが詩人の身体とは無関係に受容された後、再び詩人の存在とその身体性が顧みられ、彼女の詩に対する理解がより深まっていったのである。この受容のあり方にも表れているように、余秀華という詩人の身体とその詩は相互に補充し、刺激し合うような関係にあるようだ。本稿では余秀華の代表的な詩を翻訳で何篇か紹介しながら、彼女の詩と身体の関係について考えてゆきたい。

一 余秀華の生い立ちから走紅まで

余秀華は、一九七六年に湖北省鐘祥市石牌鎮横店村八組の農家に生まれた。分娩時の酸欠により脳性麻痺を発症し、四肢の麻痺と語音がはっきりしない構音の障害が残った。筆記が困難なため、大学受験を断念し高校を退学している。

父余文海と母周金香が二人で野良に出る。余秀華は実家で簡単な家事の手伝いをして暮らしてきた。一九歳の時、荊門に出稼ぎにきていた一二歳年上の尹世平を両親が婿養

子に迎え、尹との間に一子をもうけた。夫の伊は北京の建築現場で働く農民工（出稼ぎ農民労働者）で、一年のほとんどを留守にする。余秀華は夫との関係を、「彼は激昂しやすく、心が狭く、ケチな性格で、二人一緒になれば互いに腹を探り合い、すぐに喧嘩になる。彼との結婚は私の人生最大の失敗だった」と語り、「生活においてそもそも私は夫のことを考えず、彼も本当に私の生活に入ってきたことはない。どんなことも彼に話すことはしないし、彼も私に関心がない」と吐露している。

結婚から三年後の一九九八年、横店村での単調な生活のなかで、初めての詩「印痕」（傷跡）を書き上げた。「印痕」は詩集に収められておらず、現時点ではどのような詩かを知ることができないが、やはり自身の運命を見据えた詩だったようだ。余秀華は詩作を始めた当時のことを次のように回想している。

最初に文字で自分を表現しようとしたとき、私は詩を選択した。なぜなら私は脳性麻痺で、一字を書き上げるのにもたいへん苦勞する。それは私に最大の力で身体の均衡を保つよう求める。それから最大の力で左手を右腕で押さえつけて、ようやくねじ曲がった文字を一字書き上げることができた。あらゆる文章のスタイルの中で詩は字数が最も少ないから、そうなったのもごく自然

なことだった。

比較的少ない文字で表現可能な詩という文学様式は、余秀華の身体への負担が少なくてすむ。一本の指でひとつずつキーボードを押して言葉を紡ぎ、一日に一篇から数篇の詩を書き溜めてきた。二〇〇一年頃から地元紙『荊門日報』に詩を発表するようになる。二〇〇九年にブログを開設し、意欲的に詩を投稿し始めると徐々に反響を呼ぶようになっていった。二〇一四年には中国作家協会が主管する国家級の詩誌『詩刊』の編集者劉年の目に留まり、九月号に余秀華の特集「在打谷场上趕鷄」（脱穀場で鶏を追う）が組まれて、「我愛你」（二〇一四年）、「我養的狗，叫小巫」（私の犬、小巫）（二〇一四年）などの詩九篇と隨筆「搖搖晃晃的人間」（ゆらゆら揺れる人の世）が掲載された。同年一月一〇日には『詩刊』の微信公眾号（オフイシャルアカウント）で、彼女の同隨筆と詩が「搖搖晃晃的人間——一位腦癱患者的詩」（ゆらゆら揺れる人の世——ある脳性麻痺患者の詩）として発信され、数日のうちに閲覧数が五万を記録する。

一二月一七日には『詩刊』と人民大学共催の詩の朗読会に参加。これを受けて『人民日報』は二月二二日に余秀華の特集記事「詩裡詩外余秀華——受《詩刊》邀請，腦癱女詩人在人民大學朗誦自己的詩歌」（詩と詩以外の余秀華

——『詩刊』の招待を受け脳性麻痺の女性詩人が人民大学で自身の詩を朗読）を特大で掲載した。これらが呼び水となって、微信に流された彼女の略歴と詩「中国のほとんどを横切ってあなたと寝にゆく」が大量転送されて、一息に人口に膾炙した。

二月には初の詩集『月光落在左上——余秀華詩集』と『搖搖晃晃的人間——余秀華詩選』（ゆらゆら揺れる人の世——余秀華詩選集）（湖南文芸出版社、二〇一五年）を同時に上梓し、同年三月には台湾の印刷文学もこの二冊の繁体字版を文学叢書シリーズとして出版した。冒頭でも触れたように、『月光落在左上——余秀華詩集』はここ二〇年来の中国における詩集のベストセラーを記録している。二〇一五年四月には、雲南の新人王単単（一九八二）と共に、二〇一四年度『詩刊』青年詩人賞を受賞した。

二 余秀華現象と「大衆」論争

本節では余秀華という現象を沈睿と沈浩浩（一九七六一）の論争を中心に見ていきたい。この論争に火をつけたのは、米国在住の詩人沈睿が、一月一二日の深夜に自身の新浪のブログに掲載した「什麼是詩歌？…余秀華——這讓我徹夜不眠的詩人」（何が詩なのか？——私を眠らせない詩人余秀華）の文章である。沈睿はこの文章の中で、微信

上で余秀華の略歴と彼女の詩を読んだ時の興奮を語り、余秀華の愛情の詩「我愛你」、「中国のほとんどを横切ってあなたと寝にゆく」など数篇を引用した後に次のように評した。

このような強烈で美しさが極限に達した愛情の詩、情愛の詩を、女性の立場から誰も書くことができなかった。私は彼女は中国のエミリー・ディキンソン（一九世紀米国の女流詩人＝引用者注、以下同）だと感じた。奇抜な想像力、言葉のもつ衝撃の力強さがある。中国のほとんどの女性詩人の詩と比べて、余秀華の詩は純粹な詩であり、命の詩である。せいっぱい飾りつけられた盛宴でもホームパーティでもなく、それは言葉の流星雨であり、その輝きに思わずじっと見とれてしまう。感情の深さが人の心を打ち、胸を苦しくさせる。

沈睿がここで用いた「中国のエミリー・ディキンソン」というフレーズは、瞬く間に余秀華の詩を肯定的に捉える際の代名詞として広まり、余秀華人気火付け役となった。これに対して、「七〇後」（一九七〇年代生まれ）の詩人で「下半身詩歌運動」（二〇〇〇年に沈浩浩が創刊した詩誌『下半身』を中心として展開された。自身の肉体に密着した筆致を重視する）の発信者であり、出版界の成功者でも

ある沈浩波は、一月一九日付の『詩歌は一束光』（詩とは一束の光）の微信公衆号に、「談談余秀華的詩歌以及大衆閱讀口味」（余秀華の詩及び大衆の好み）を寄せ、その中で次のように批評した。

詩とは個の心の魂の芸術であつて、それはなによりまず個人のものである。それは決してわざと大衆を拒絶するものではないが、しかしそれは生まれつきの拒絶者でもある。個人の魂の存在はかねてより集体に対する無意識の反逆でしかあり得ず、偶然に重なることもあるが、それはやはり詩人となる個体と読者となる個体の間の魂の呼応である。

沈浩波は続けて、「詩歌とはあらゆる文章形式と芸術形態のなかで、個人の精神的な昇華の程度が最高のもので、したがつてそれは必然的に大衆という集体から最も遠いところにある」とし、優れた詩とは大衆を拒絶するものという見方を強調する。そして余秀華人気と大衆及びメディアとの関係について次のように言及している。

今日の大衆はより卑俗で、功利的で、偽善に満ちた一群である。だから、人々（特にメディア）が詩人余秀華の前に、必ずわざわざ「脳性麻痺」という形容詞をつ

け、「脳性麻痺詩人余秀華」というこの組み合わせを使うのを目にすると、私は強い嫌悪を感じるのである。これは詩人の疾病を使って偽善の物見客を呼び寄せるメディアの本能なのである。この個人メディアの時代において、大衆のなかの一人一人がみなこの手の卑俗な本能を備えているのである。

その後、富士康（Foxconn）の労働者で「打工詩人」（労働者詩人）と呼ばれた許立志（一九九〇—二〇一四）を引き合いに出し、「メディアと公衆にとって、「自殺的打工詩人」（自殺した労働者詩人）や「脳癱詩人」（脳性麻痺詩人）といったレッテルを貼ることでは彼らの興味を惹くことができな^⑩いのだ」と述べ、さらに「多くの詩人がこぞつて余秀華の詩に対して讃嘆の声をあげた。その中で最も注目すべきなのは、米国在住の女性詩人沈睿であり、広く流布した文章の中で彼女は、余秀華を中国のエミリー・ディキンソンだと称した^⑪」としたうえで、

私は大衆の趣と専門家の趣とがこのように「千載一遇のめぐり合い」をすることを見たことがないし、このような「美談」の存在を、私は信じない。したがって、私はこれら提灯持ちの現代詩に対する審美観に疑いをもつ^⑫。

と述べて沈睿の詩観を酷評した。沈浩波は同時に実際に余秀華の詩を挙げ、余秀華の詩は使い古された抒情的な要素が多く含まれる通俗的な表現形式で、世俗に媚びるものと厳しい評価を下している。

これに対して沈睿は、「中国有些男詩人自恋得厲害」(一部の中国の男性詩人はひどいナルシストである)という微信上の文章のなかで、

沈浩波はそもそも大衆を見下している。大衆を蔑むことは中国詩の致命傷だ。……私のブログには数百のコメントが残されている。私の考えは、誰が大衆なのか?ということだ。もし沈浩波がこれらの人をみな取るに足らない大衆だと考えているのなら、彼は大衆を侮辱しているのだ。¹⁵⁾

と激しく反駁し、余秀華の詩を改めて評価した。

沈浩波は、詩と大衆が隔絶したものだとする姿勢を崩さず、余秀華の身体性や境遇を完全に排し、詩そのものをおくまで形式的に論じようとする。一方、沈睿は女権擁護の立場から中国の男権主義を批判し、社会の周縁にある余秀華の身体性や出自を含めて彼女の詩に理解を示した。

図らずもこの両者の論争が、余秀華の知名度をさらに一般大衆にまで押し広げることになった。この後余秀華現象

は、中国当代(新中国建国以後を指す時代区分)詩壇にまで影響を及ぼすことになる。二月九日、中国作協と詩刊社及び文芸報社が合同で、「草根詩人」現象と詩歌新生態研討会「(草の根詩人)現象と詩歌の新生態に関するシンポジウム」を開催した。

このシンポジウムには、李敬沢、呉思敬、彭学明、林莽、霍俊明、劉立雲ら作協の著名な詩人及び批評家十数名が参加して、「草の根詩」の特徴や現実との関係、新しいメディアの詩歌生態に対する影響などの問題を討論した。同シンポジウムは、直接的には、一大センセーションを巻き起こした余秀華現象を受けて開催されたものにほかならない。劉立雲は発言の冒頭で、「ゆらゆら揺れる」農婦余秀華は頗る勢いのある詩で、「草の根詩人」現象と詩の新しい生態に火をつけ、それは公共の事件にまで発展した¹⁶⁾と述べて、余秀華現象に対する称賛と歓迎を表明した。

また、呉思敬はこのシンポジウムのなかで、余秀華現象を中国当代詩のなかに次のように位置づけた。

ここ数年のインターネットの詩歌に対する炒作(メディア上で過剰報道のこと)は、ほとんどがマイナス面のものであった。例えば、「梨花体」(ネット上で流行った悪ふざけの類いの「詩」のパロディ。なんでもない文を改行して詩の体裁にしただけのもの)、「羊羔体」(中

国のネット市民が魯迅文学賞詩歌賞を受賞した車延高の口語詩を皮肉った造語」、「方方と柳忠秧の争い」（湖北省作家協会主席の方方が、湖北の詩人柳忠秧の詩を魯迅文学賞に推薦されるに値しないとして柳を名指しで批判した）、「周嘯天詩詞之争」（魯迅文学賞詩歌賞を受賞した四川の詩人周嘯天の古体詩をめぐる論争）……この一連の煽りのなかで、当代詩の核心的な価値観は脱構築され、大衆の娯楽の道具に成り果てた。しかし余秀華の過剩報道はこれとは異なる。余秀華の現象はむしろインターネットのプラス面の力量が多分に体现され、ネット市民の当代詩に対する理解がまさに深まっていることを反映したものであった。

ここでは、インターネット時代に入りマイナスイメージばかりが先行していた当代詩が、初めてネット市民から好意的に、かつ大規模に受容され、その後現象が詩壇にまで波及していった過程が肯定的に捉えられている。このようにして、微信を介して中国全土に広がった余秀華という文化現象は、沈睿と沈浩波の「大衆」をめぐる論争を経て、遂には詩壇の内部深くにまで浸透していったのである。

現在中国では余秀華現象がひとつの起爆剤となつて、人々の現代詩に対する関心が復活しつつあることも注目している。『為你読詩』（あなたのために読む詩）や

『読首詩再睡覺』（数篇の詩を読んでおやすみ）、『詩刊社』等の微信公眾号の定期購読者は十万人から数十万人に達し、海子（一九六四—一九八九）や昌耀（一九三六—二〇〇〇）の記念日には、それぞれの詩が微信の「朋友圈」（グループ）で大量転送される現象も起きている。劉年はこのことについて、「詩歌の黄金時代」という言葉で表現し、また『詩刊』の副編集長李少君は「詩歌がふたたび人々の日常に帰ってきた」という見方を示している。こうした詩をめぐる事象の広がりや変化から見ても、余秀華現象が単なる一過性型のブームではなく、中国当代詩の生態にまで影響を及ぼした文化的な事件だったことが改めて理解されるよう。

三 肉体と精神のジレンマ

二〇一五年一月中旬から人気が急上昇した後、余秀華は自身のブログに、「私の身分の順序はこうなのだ。女、農民、詩人。この順序は永遠に入れ変わることはない」というコメントを残した。また、「女、農民、詩人のなかで、女が最も根本的なひとつだ。ほかのふたつは必要なくともあるし不要なくともある。女からは直接詩に渡っていくのが、詩人にはできない」とも話す。この身分順序は彼女の詩とどのように関係し、どのような意味をもっているのだ

ろうか。女、農民、身体といった余秀華の立ち位置に注目しながら、出世作の「中国のほとんどもを横切つてあなたと寝にゆく」を見ていきたい。

中国のほとんどもを横切つてあなたと寝にゆく

ほんとうは、あなたと寝ることあなたに寝られることはさして変わらない、それはふたつの肉体がぶつかり合う力というだけで、その力が急ぎたてて開かせた花というだけで、その花びらが仮想した春が私たちに命がふたたびよみがえりつつあると錯覚させているにすぎないだけ

ほとんどの中国では、どんなことだつて起きている
火山が噴火し、川は枯れている

話のタネにもならないどこかの政治犯と流民たち
銃口にさらされているどこかの四不像と丹頂鶴

私は銃弾の雨を潜り抜けてあなたと寝にゆく

私は無数の暗い夜を一つの黎明に押し込めてあなたと寝にゆく

私はどこまでも駆けながら、無数にいる私を一人の私に変えてあなたと寝にゆく

もちろん、どこかの蝶に分かれ道へと誘われることだつてあるだろう

だれかの褒め言葉を春と見なしてしまうこともあるだろう

横店とよく似た村を故郷と見なしてしまうこともあるだろう

でもそれらはみな

私があなたと寝にゆくためになくはならない理由のようなもの^①

この詩は『詩刊』の余秀華特集には採られておらず、微信を通じて広まった。女権擁護の立場からこの詩が広まっていたことは特筆すべき点である。前述したように、米国在住の沈睿がこの詩を賞賛し、その後北京の女権擁護の民間団体「女権之声」がすぐに沈睿に呼応して、微信の記事「中国的艾米莉・迪金森——余秀華詩十首」（中国のエミリー・ディキンソン——余秀華の詩十首）（二〇一五年一月一五日）の中でこの詩を取り上げている。

原文の「睡你^{シニイ}」は、「あなたと寝にゆく」と婉曲に訳した。実際はより直接的な性的欲望を表す言葉で、その言葉はほとんど例外なく男性から女性へ向けて発せられる。作者が女性であるということが、すなわちそれが女性から男性へ投げかけられた詩であったということが、「睡你^{シニイ}」という言葉が想起させる男権主義的な既成概念に揺さぶりをかけるものであったし、同時にフェミニストたちの注目を

集めることになったのである。

余秀華はこの詩の中で恋人のもとへ「銃弾の雨を潜り抜けてあなたと寝にゆく」といった熾烈な愛情を表現している。彼女自身は「未だかつて愛情とは無縁だ」と再三語っているが、詩作においては逆に愛情を渴望し、直接的に情欲を表現する。「睡你」^{シニイテ}だけではなく、「どこまでも駆け」^{シニイテ}することも余秀華にとっては強い身体的な欲望であり、どこまでも駆けることで作者の精神は不自由な肉体から解放されていくのである。

「私があなたと寝にゆく」までの道のりは長く険しい。中国を横切って進むとき、「私」は天災（火山の噴火）や環境汚染（枯れた川）、官僚の汚職（政治犯）、大量の農民工の都市への流入（流民）といった中国の厳しい現実に向面する。「どんなことだって起きている」というこうした中国の厳しい現実が先々で「私」の行く手を阻み、それでも「私」は「銃弾の雨を潜り抜けてあなたと寝にゆく」のである。しかし結局、「私」は「あなた」の元へたどり着くことができない。私は依然「あなたと寝にゆく」旅の途上にあるのだ。

仮想された「あなた」への愛情は、別の詩「在我腐朽的肉体上」（私の腐った肉体で）では、次のように表れる。

禁錮されなかった、自由と愛

一生をかけて転がりつづけたこの玉は、終に私たちの身体を転がり出てはいかなかった

なにかを得るために、私たちは青春を捧げる

なにかを証明するために、私たちは老いを受け入れる

この心は、いまだにこの道を駆け抜けている——あなた

に逢い

詩を語らい星々を仰ぐため

……

私はずっと抑えることができないでいる

腐りきった身体であなたの肉体に接吻する衝動を²²

この詩でも「中国のほとんどもを横切ってあなたと寝にゆく」で綴られた内容と同様に、ひとりの女性の肉体に閉じ込められた精神と愛情の解放が謳われている。「女から直接詩に渡っていく」とはこのような筆致のことをいうのだろう。そしてそのように「女から直接詩に渡っていく」行為が、詩の中に余秀華自身の女性的な身体をむきだしのままに表出させるのである。

余秀華は、「この身体に収められたこの魂は、まったく釣り合いが取れていません。魂が必要とするものはいつもの身体によって制限されてしまうのです²³」と、肉体と精神の不調和がもたらす深いジレンマを語る。

作家のこうした言葉を詩に重ね合わせるとき、彼女の詩の根底には、精神が障害のある身体を乗り越えられないことから起こる情感の挫折が漂っていることが見えてくる。こうした精神と肉体の乖離、そして矛盾や不調和が、彼女のこれらの愛情の詩のなかで、身体の解放と愛情への渴望として表出するのではないだろうか。

四 運命への抵抗と農村の現実

自由奔放に女性の情欲を描き出す一方、余秀華のもう一つの詩風は、農村における自身の現実生活を淡々と白描する、いわば現代中国の農村リアリズムである。まずは、愛情のない農民夫婦の姿が描かれた「私の犬、小巫」から見てみたい。

私の犬、小巫^{シヤオウイ}

私がびっこをひいて門を出ると、犬は私の後をついてくる

私たちは歩いて畑を越え、あぜ道を越えて、北へ向かう、祖母の家にゆくのだ

私が転んで田んぼの溝に落ちてても、犬は尻尾を振りつつ

ける
私が手を伸ばすと、犬は私の手についた血をきれいに舐める

彼は酒に酔うと、おれは北京に女がいると言う
おまえよりもきれいな女が。仕事がないとき、彼らは踊りにゆく

彼は躍りにやってくる女が好き
彼女たちの尻がゆらゆら揺れるのを眺めるのが好き
彼女たちはベッドで声を上げる、いい声を上げる。お前みたいにくちを一文字に結んで押し黙っているようなことはない、と彼は言う
ましてや顔をすっぱり覆い隠すことなんて

私は黙々と飯をかきこんで

「小巫、小巫」と呼ぶと、肉を一切れ投げてやる

犬はしきりに尻尾を振って、嬉しそうにオンオン吠える
彼が私の髪をひつつかんで、私を壁にたたきつけているとき、

小巫はずっと尻尾を振りつつける

痛みを恐れない人間を前にして、彼は無力にただただずむばかり

私たちは祖母の家に着いたあと、ようやく思い出す
彼女が死んでもう久しいこと⁽²⁵⁾を

「私」の傍らに静かに寄り添う飼犬の「小巫^{シヤウフ}」を介して、望まない結婚をした二人の残酷な関係性が淡々と描かれている。

劉年は、余秀華の詩には、着飾って汗の匂い一つしない現代中国の女性詩人にはない独自の醜さや泥臭さがあり、「字と字の間にははつきりと血痕が滲みでている」と記しているが、この詩の字間からも血の匂いが嗅ぎ取られ、夫の出稼ぎに頼る中国農村の現実と往々にして暴力を伴う前近代的な男女関係が浮き彫りになってくる。

もう一篇の詩「可疑的身份」（疑わしき身分）では、

私は月光をもつが、私は未だかつて輝いたことがない。

私は桃の花をもつが

未だに花開いたことがない

私は一生を吹き抜ける春の風をもつが、私のもとまで吹いてよこさない⁽²⁶⁾

と自身の境遇を農村の自然に喩えて吐露する。しかしそこに憤りの感情は見あたらず、むしろ運命を受け入れた人間の諦めのようなものが看取される。

彼女は、「実は私はそもそも静かな人間ではない。私はこのような運命に甘んずることはできない。理不尽な境遇を受け入れて耐え忍ぶことができないのだ。けれども、私のあらゆる抗争は全て失敗に終わり、私はヒステリックな女となって人前でわめき散らすのだ」と書き、『人民日報』のインタビューでも「こんな運命をだれが甘んじて受け入れるんですか！ こんなところを！ こんな生活を！ 飛び立ちたくとも飛び立てないのです！」と語る。このように、彼女の現実生活の大半は、常におこつているといふ身体の痛みとこうした強いフラストレーションに支配されていて、そのような日常の中で、「私にとって、詩を書くときのみ、私は完全になる、静かになる、満ち足りる⁽²⁹⁾」のである。

「横店村的下午」（横店村の午後）（二〇一四年）は、余家が暮らす寒村の情景を描いた詩である。春の陽光が村中に均しく降り注ぐ風景がスケッチされた後、次のように綴られてゆく。

私は分配された光と影によって自身の半生を継ぎ合せ

母はこれらのこまごましたもので白髪を継ぎ合せ

わたしたちはこんな春のただ中にいて

横店村をふたたび最初から温め直しているだけだ⁽³⁰⁾

この詩の冒頭にある生命力溢れる春の景色は、すぐに閉鎖的な横店村の日々の単調な繰り返しに収斂されてしまう。

「私」と「母」は、春の熱度によって、横店村の暮らしを毎年「温め直して」歳を重ねてきたのである。一方、「我愛你」で描かれているのは横店村の冬である。

我愛你

無味乾燥な日々を生きる、毎日水を汲み、飯を炊き、決められた時間に薬を飲む

日当りがいいときは自分を中に放り込む、まるで一塊の陳皮チェンピ（「ミカンの果皮」）を入れて

お茶と交互に飲むように——菊花ジューファ、茉莉モリリ、玫瑰メイグイ、檸檬リンモン
この美しいものたちはまるで私を春の道へと連れだすかのようにだ

だから私はそのつどそのつど心の中の雪を押さえつけるようにする

それらはあまりに白く、あまりに春に近づこうとしすぎから

清潔な庭であなたの詩を読む。この世の中の現実
恍惚としてまるで突然飛び去る雀たちのようだ

時は、白くて美しい。私は断腸の思いなどとは無縁な人

もしあなたに本を一冊送り届けるならば、私はあなたに詩を送ることはないだろう

私はあなたに、植物のことが書かれた、作物のことが書かれた本を送り

あなたに稲と稗の違いを伝えるだろう

あなたに、一本の稗がびくびくしながらも待っている
春のことを伝えるだろう⁽³⁾

「私」は、無味乾燥とした村の単調な日常の中で春を心待ちにし、身近にある素朴で小さな美しいものを探しだしてきては、「あなた」に告げてゆく。農家の清潔な庭の前から都会の「あなた」へと続く春の道が、「私」の前に浮かび上がってくるような想いの詩である。

最後に農民の父を謳った詩を二篇続けて見てみたい。
「一包麦子」（一袋の麦（二〇一四年）には、障害のある娘を養うため働き続ける老いた父を愛おしむ気持ち綴られている。

一袋の麦

二度目、彼はそれを腰の高さまで持ち上げるが

それは滑り落ちてゆく

去年はひよいと肩に担ぎ上げてたつていうのに、

一年でできなくなるなんてそんな馬鹿なことがあるわ
きゃねえ、と彼は罵る

三度目、私は彼に手を貸していつしよに麦の袋を彼の肩
に担ぎ上げた

父ちゃん、父ちゃんは白髪一本ないじゃないか

小麦の袋一袋担ぎ上げられないなんて

嘘つきさ

でも私は知っているのだ。九十歳になつても父に白髪が
生えることはないことを

父には障害のある娘がおり、大学受験をひかえた孫がい
る

だから彼の白髪は
生えてくる勇気がないのだ⁽²⁸⁾

「手（致父親）—（手（父に贈る））では、余秀華の父に對
する愛憎が、農民である父の手を通して描かれてゆく。

手（父に贈る）

私はあなたの前に立ちふさがつて、死を迎えたいのです

私はあなたに復讐したいのです——農村の芸術家、
泥使いの名手が

私を指先でつまみ出した時

びつこの泥人形を作り出したのです

たとえそのあと、あなたがろつ骨を削つて私の脚にした
としても

私はやはりまともに歩くことはできません

どうかその歯を食いしばり、私の髪を一本残らず抜き
取つて、あなたの頭に載せてください

私の苦しみと恨みをあなたの頭の上で永遠に風に靡かせ
てください

七十八になつてもあなたに白髪の榮譽を与えないため
に

そのあと、あなたの木の根のような指で、土を盛り私の
墓にしてください

そのあと、どうかそこから遠く離れて、もう私の供養を
しないでください

私の土盛りの墓に生えてきた草を抜かないでください
来世はもうあなたの娘にはなりません

たとえ余家の番犬になつたとしても⁽²⁹⁾

余秀華は自身の障害の種を、農民の父の手に重ね合わせ
る。その手が障害のある自身を、その肉体を作り出したの

だと父への深い恨みを表白し、しかしその父の手で自身を墓に埋めて欲しいと懇願するのである。

このように「私」の父に対する深い憎しみは、父への深い愛情と表裏一体を成している。こうした父をテーマとした余秀華の一連の詩は、自身の肉体、生命、自己存在への根源的な問いかけとなつて、再び彼女自身に投げ返されるのである。

結語

本稿で検討してきた何篇かに限つていえば、余秀華の詩には二つの傾向が見いだせる。一つは、運命への抵抗である。それは「中国のほとんどもを横切つてあなたと寝にゆく」のように、愛情に対する熾烈な渴望として表れる。作者の魂はその不自由な肉体から解き放たれ、村を飛び出して恋人のもとへ短い旅に出るのである。

余秀華は詩作を、「たとえ私がこの社会に一片の清潔さもないほどにすつかり汚染されてしまったとしても、詩に戻れば、私はまたきれいになってゆく。詩は絶えず私を浄化し、私をあわれみ慈しんでくれる」⁽⁹⁴⁾ような行為として捉えている。すなわち余秀華にとつて詩とは、中国の現実に汚染された身体を洗い清めるための自己浄化的な行為なのだ。彼女の身体と詩は、相互に補完し合うような緊密な関

係性を築いているのである。

二つ目の創作傾向は、自身の運命を真摯に受け入れる女性農民のリアリズム詩である。医療事故による重い障害、親の決めた愛情のない結婚、貧困、家庭内暴力、農民工、父への愛憎など、本稿で見えてきただけでも、余秀華の肉体には中国農村の困難な現実が纏いつている。詩の中に響き渡るひとりの農村で生きる女性の声は、余秀華のきわめて個人的な肉声であるとともに、それはまさに現代中国を代弁した時代の声なのである。彼女の詩には、一九七八年からの改革開放後の経済成長によって莫大な富を生む一方で、環境の悪化や格差社会の拡大などの深刻な問題を抱える現代中国の姿が、その底辺で生きる人間の情感によって体現されているのだ。

新中国建国後に書かれた詩をざつと振り返つてみれば、たとえば食指（一九四八―）は、「這是四二零八分的北京（四時八分の北京）（一九六八年）」で文革時の下放により故郷を離れ農村へ向かう知識青年たちの万感の想いを代弁した。北島（一九四九―）は「回答」（一九七九年）で、「我―不―相―信！」（私は―信じ―ない！）と旧時代との決別を高らかに宣言し、青年の心を強く揺さぶった。顧城（一九五六一―一九九三）は「黒眼晴（黒い眼）（一九七九年）」で、文革中に青春を迎えた世代の心の暗黒と新時代への渴望を表現した。

これら新中国の各世代の声を代弁するような草の根から生まれた先人たちの詩と同様に、余秀華の詩「穿過大半个中国去睡你」も一人の女性から発せられた赤裸々な愛情表現として、インターネット時代の新たな言論空間が拾いあげた現代農村女性の個の肉声として、格差社会の時代の声として、同時代の中国の人々の心に長く記憶されてゆくのではないだろうか。

注

- 〈1〉 李少君「詩歌、在重回人們的日常生活」『人民日報』二〇一五年四月七日、一四面。
- 〈2〉 劉年「詩歌，是人間的藥——余秀華和窓戶的詩歌編後記」『詩刊』二〇一四年九月号下半月刊、二二頁。以下、中国語からの日本語訳は全て筆者による。
- 〈3〉 二〇一五年二月九日に北京で開催された「草根詩人」現象与詩歌新生態研討会」での吳思敬の発言。引用部は、吳思敬「由余秀華現象引發的關於当前詩歌生態的思考」、「中国作家網」<http://www.chinawriter.com.cn>を参照した（二〇一五年五月一日参照）。
- 〈4〉 「詩裡詩外余秀華」『人民日報』二〇一四年十二月二二日、一四面。
- 〈5〉 「余秀華——從女人過渡到詩歌」『中国新聞週刊』第六九四期（二〇一五年一月二六日）、七五頁。
- 〈6〉 余秀華「搖搖晃晃的人間」『詩刊』二〇一四年九月号下半月刊、一七頁。
- 〈7〉 同賞の審査委員は、「余秀華の詩は堅実であり、真摯である。それは現実という血管のなかに流れる真実の詩であり、生存の涙の中から湧き出す痛みのある」と講評した。『詩刊』二〇一四年度詩人獎頒獎」『中国作家網』（二〇一五年四月二九日）<http://www.chinawriter.com.cn/>（二〇一五年五月一日参照）。
- 〈8〉 沈睿「什麼是詩歌？…余秀華——這讓我徹夜不眠的詩人」二〇一五年一月二日。沈睿の新浪微博に掲載。
http://blog.sina.com.cn/blog_5fb75b80102w0z.html（二〇一五年五月一日参照）。
- 〈9〉 沈浩波「談談余秀華的詩歌以及大眾閱讀口味」（二〇一五年一月二九日）『詩歌是一束光』微信号。
- 〈10〉 前掲、沈浩波「談談余秀華的詩歌以及大眾閱讀口味」。
- 〈11〉 同右。
- 〈12〉 同右。
- 〈13〉 同右。
- 〈14〉 同右。
- 〈15〉 沈睿「中国有些男詩人自恋得厲害」『新京報書評週刊』微信公眾号、二〇一五年一月二二日。
- 〈16〉 前掲「草根詩人」現象与詩歌新生態研討会」での劉立雲の発言。
- 〈17〉 前掲、吳思敬「由余秀華現象引發的關於当前詩歌生態的思考」。

〈18〉前掲、李少君「詩歌，在重回人們的日常生活」を参照した。

〈19〉余秀華「余秀華的博客二〇一五年一月一六日、<http://blog.sina.com.cn/yuxiuhua1976> (二〇一五年五月一日参照)。

〈20〉前掲「從女人過渡到詩歌」一七六頁。

〈21〉余秀華「穿過大半個中國去睡你——余秀華詩選」『詩刊社』微信号 (二〇一五年一月一七日)。

〈22〉余秀華『搖搖晃晃的人間——余秀華詩選』湖南文芸出版社、二〇一五年、七二頁。

〈23〉「鏘鏘三人行」『鳳凰視頻』二〇一五年二月五日放送。

〈24〉余秀華『月光落在左手上——余秀華詩集』廣西師範大學出版社、二〇一五年、四頁。

〈25〉前掲、劉年「詩歌，是人間的葉——余秀華和窗戶的詩歌編後記」二二頁。

〈26〉前掲、余秀華『搖搖晃晃的人間——余秀華詩選』五八頁。

〈27〉前掲「搖搖晃晃的人間」一七頁。

〈28〉前掲「詩裡詩外余秀華」一四面。

〈29〉前掲「搖搖晃晃的人間」一七頁。

〈30〉前掲、余秀華『月光落在左手上——余秀華詩集』四〇頁。

〈31〉同右、三頁。

〈32〉同右、八九頁。

〈33〉初出不明。余秀華「余秀華的博客」二〇一〇年一二月九日の記事「豐靈對我的詩評，謝謝他了」から引用した

(二〇一五年五月一日参照)。
〈34〉余秀華、前掲「搖搖晃晃的人間」一七頁。